

Title	贈ることば
Sub Title	In gratitude and appreciation
Author	奥田, 暁代(Okuda, Akiyo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2019
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.140 (2019. 2) ,p.53- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-20190228-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

贈ることば

奥田 暁代

長きにわたり法学部に貢献されてきました金谷信宏先生が、2019年3月をもって定年退職されます。ご着任から40年ということですから、日吉の心にぽっかり穴があくような寂しさを覚えます。

金谷先生は、北海道大学大学院理学研究科植物学専攻修士課程を修了されてすぐ、1979年に法学部の助手（実験担当）となられました。1988年に理学博士号を取得された後、1993年には専任講師に就任され、1990年に助教授、2007年に准教授とнаられています。1997年から2003年まで3期にわたって学習指導副主任をお務めになられました。2007年から通信教育部の学習指導主任もなされています。このような重責を担う役職以外にも、学部内のさまざまな委員会に関わってこられましたのは、やはりそのお仕事ぶりばかりでなく、誠実なお人柄に誰もが魅きつけられてきたからではないでしょうか。

金谷先生がご尽力されたお役目に広報委員会委員があります。幸せなことに2010年からご一緒させていただきました。締め切りに追われることも多い委員会でしたが、金谷先生はいつでも穏やかに、どのような状況であってもさらりと対応されます。法学部冊子「個性のススメ」の作成にあたっては、紙面で紹介する学生を探すばかりでなく、インタビューの依頼も先生方にしなければなりません。金谷先生はたいへんスマートにお願いをされ（短局的を射たメールをお書きになります）、お断りされることもなくどんどん進めて行かれます。選んでこられた学生もすばらしくパンフレットにピッタリでした。小さな誤植なども見逃されず、さすが理系の先生、細部までご覧になる！と思うようなこともありました。ごく自然に気遣いをされます。メールの最後は大抵「ついでに頼みましょうか」など、「〇〇しておきましょうか」というご提案で終えら

れていました。煩雑なことを面倒とは思わせない書き方で、先に次々と済ませていかれるのです。いつも頼りにさせていただき、委員の任期があけたときは残念に思うほどでした。聞き上手の金谷先生ですから、その後も折に触れてお話しさせていただきました。キャンパスで運よくお会いしてそのまま立ち話で話し込んでしまう、ということもありました。

まさに心配りの方です。広報委員会関連の仕事で、撮影後に皆さんとのお食事にお誘いいただいたときのメールには、「お子さんのことがあるから」、「可能ならと思ひまして」、「無理しないでくださいね」などのおことばが添えられています。まったく誘わないということもありえたはずです。実際に、多くの方に配慮いただいていると心苦しう思ったこともありましたが、でも金谷先生は、まずお声をかけてくださり、そのうえでこちらが断りやすいよう心配りされています。いつもお心にかけていただき、ご親切が身に沁みました。私のように金谷先生の優しさに触れた同僚の先生方はほかにもたくさんいるのではないのでしょうか。

金谷先生がお書きになられた論文には、「タマネギ根端細胞での小核誘発を指標とした河川水の変異原性」、「植物磨碎抽出液によるマレイン酸ヒドラジドの活性化」、「ソラマメ根端磨碎抽出液によるエタノールの代謝活性化と姉妹染色分体交換誘発」、「アルキル化剤による姉妹染色分体交換誘発へのノルハルマンとハルマンの効果」などがあります。金谷先生はこれまで、染色体異常や小核誘発を指標として、遺伝子に傷をつける化学物質を調べてこられました。例えば、アニリンという染料の原料や、マレイン酸ヒドラジドなどの農薬が、ソラマメやタマネギ細胞に、染色体異常や小核を誘発することを見出しました。また、横浜市、東京都、大阪府の河川水による小核誘発を調べることによって、東京都の隅田川（駒形橋付近）と大阪府の淀川（長柄橋付近）から採取した河川水に変異原が含まれていることを示されました。このような、突然変異を誘発する「変異原」についてのご業績は、染色体学会などで発表されています。

『三田評論』に掲載されたエッセイやご共著『法学・経済学・自然科学から考える環境問題』（2017年）では、ご専門の立場から、一般の読者にも分かり

やすく環境変異原（DNAに傷をつける作用を持つ環境因子）や生物多様性の危機についてお書きになられています。環境もそうですが、私達も生き物ですから、先生のご研究は私達に直接に関係すると言えます。ヒトの身体を構成している体細胞での突然変異は発ガンに関わる場合があるということなので、身の回りに突然変異を起こすのに十分な量の変異原が存在していることが分かれば、それらを減らす方法を開発することにより発ガン予防に寄与することができます。化学物質や河川水の変異原性を植物細胞での染色体異常や小核誘発を指標にして調べる先生のご研究はまさに期待される分野なのです。

ご専門について研鑽を積まれる傍ら、学部のためにもさまざまにご活躍いただきました。金谷先生のこれまでのご尽力に心より感謝申し上げます。